

少しだけ逃げる。
また挑むために。

逃げ旅

島根



第1回短編小説『逃げ旅』® ～好きなこと～

短編小説『逃げ旅』® ～好きなこと～

好きなことを仕事にしていますか？

30歳手前になって「安定」ということが頭に浮かぶ。

「結婚」もその一つであるが、「今の彼氏」は飲食店のアルバイト、結婚には踏み込めない理由の一つでもある。

「私が頑張らなければ」とプレッシャーが重くのしかかる。安定の職業と言えれば公務員、試験を受けられる最後のチャンスかもしれない。迷走しているときにいつも浮かぶのは、おばあちゃん。彼女が経営している食堂の温かいシチューが食べたくなった。おばあちゃんのおかげで一人暮らしでも料理が苦にならない。

やさしいおばあちゃんは私の愚痴をいつも聞いてくれる。しかし、おばあちゃんも年なので「早く辞めたいけど」と逆に返された。

急に声のトーンが変わり、「結ちゃん、一緒に旅行に行かないか。温かい温泉、温かい料理、温かい人に触れられるいい場所があるから。」

「どこ？」 そこは。



出雲大社

おばあちゃんと結（ゆい）、そしてお母さんの女子旅がスタート。
『ご縁と美肌のしまねへ』

【1日目】

最初の場所は出雲大社ではなく、縁切りの宇美神社、神主さんから突然、「縁を切りたいヒト、コト、モノ、何でもいいので書いてください」と。私は戸惑い、何の縁を切りたいか迷った。「今の広告代理店の仕事？、彼氏？それとも」。

逆に「縁を結びたいコト、モノ、ヒト」とも言われ、「何だろう」と迷いながら神主さんから渡された札に縁切りと縁結びをしたいことを書いた。



【宇美神社（縁切り神社）】



【出雲大社（縁結び神社）】

ここからは神様の話、大国主命（おおくにぬしのみこと）は怪我をしたうさぎをガマの油を塗って直した。その話がきっかけで、美人の八上比売（やかみひめ）と結婚をした。さまざまな神々の協力を得て、農耕や薬、殖産など、人々の生活に欠かせない知恵を授けた出雲の国造りが始まったとガイドさんが熱く出雲大社で語っていた。

旧暦の10月に神様が集まる神行事、10月のことは神無月と言うが、出雲だけは神在月、神様が全国から集まると言う。この神話は古事記や日本書紀に書かれているのも驚きである。



【神門通りの出雲ぜんざい】



【稲佐の浜（神様が集う入口）】

神門通りで買い物、神在餅 出雲ぜんざいを試食した。程よい甘さで甘党ではない私でもおいしく食べられた。ぜんざい発祥地でもあり、あばあちゃんは食堂の常連客のためにおそらく、一人一人の顔を浮かべながら‘ニコニコ’してぜんざいをたくさん買った。

そして、今日の締めくくりに稲佐の浜に行く。ここから神様が渡って来たらしい。夕日をみながら大きく深呼吸、一日の終わりを告げるサインは夕日が海に沈むとき。「マジックアワー」はなぜか、寂しさ与人恋しくなる瞬間でもある。



【一畑薬師（一畑寺）】



【精進料理（イメージ）】

夕食は一畑薬師というお寺で精進料理、動物性のものを一切使っていない。見た目の豪華さと味の良さに感銘を受けた。情緒溢れるお寺、心が素直になり、自然と食への感謝が湧き上がる。

いつもおばあちゃんが作ってくれた温かい野菜たっぷりのシチュー、お母さんは私の好みにシチューを和風リゾットにアレンジ、ふと、愛情たっぷりの料理を思い出した。



【禅とお経体験】



【朝粥】

昨日早く寝たせいか、小鳥のさえずりで携帯の目覚まし鳴る前に目が覚めた。

朝からの体験は座禅、初めての体験で不安がいっぱい、作法なども全く分からなかった。しかし、呼吸を意識して一点に集中、徐々に色々な雑念が遠くに消えつつあったが、少し、集中力が切れてきたその瞬間、住職に警策（きょうさん）と言われる棒で一撃、一気に目が覚めた。こうして初めての座禅の経験は集中と肩の痛みで終わった。

そして、朝粥、食への感謝を声に出して読み上げ、食べる時には音を立ててはいけない。おしんことお湯でお茶碗を洗う作法、そういえば、おばあちゃんが最後にごはん茶碗にお茶を入れて飲んでいたなあと思出した。茶碗の掃除だったと。

何ごとにも意味があるのだと先人達の知恵は理に適っている。

【2日目】

2日目の最初の場所、**龍頭が滝（りゅうずがたき）**、ここはガイドさんから「あまり説明をしません。ここは感じる場所だから」と。大きく深呼吸、マイナスイオンを感じながら1日目の縁切り、縁結びを思い出していた。そして今日の座禅で学んだ無になることも意識し、心が浄化されていく自分に気づく。

私の悩みもこの滝と一緒に流れていくスピリチュアルな感覚となり、龍が昇るイメージが湧いてきた。「あれ、私、スピリチュアルな世界は信じなかったけどな」と自分で心の中で突っ込んだ。



【龍頭が滝】



【世界遺産の石見銀山】

午後には世界遺産の石見銀山、専門ガイドさんの話に耳を傾ける。時折、オヤジギャグをまぜながら。

1500年頃の暮らし、銀山中心の町が栄える。農業の不安定な職業に変わる銀山、しかし、鉱山病からの短命、生活という安定、命、お金など「生きる」という壮大なテーマを頭の中でイメージした。



【世界遺産の温泉津温泉の共同風呂】

先人たちが残した技法や生きる知恵など考えながら共同風呂温泉の熱いお湯に入る。きっと先人たちもこの湯で癒し、薬師湯だけあって傷も治したんだと。50度近くの湯、最初は入れなかったが、近所のおばさんに水をかけられ、そして島根のイントネーションで「勢いよく入りなさい」と少し背中を押された。足がピリピリ、最初は熱かったが、徐々に慣れてきた。しかし、3分が限界、浴衣で温泉街から旅館までの帰る途中、体のほてり、足のしびれが続き、今でもその感覚は覚えている。

夕食は旅館の懐石料理、特に、この地方の料理、鯛の奉書焼き（たいのほうしょやき）は、魚介類を奉書紙で包み、天火で蒸し焼きにした料理、鯛は「めでたい」という語呂合わせから縁起が良いとされており、鯛の姿焼きは「最初から最後まで成し遂げられる」と意味があると自慢そうに話す料理長。

漁師さんの新鮮な海の幸、やわらかいお肉も絶品。しかし、精進料理で学んだ食への感謝、あらためて生命の大切さを噛みしめながら、美味しくいただきました。



【鯛の奉書焼】



【ノスタルジックな町並み木綿街道】



【創業明治10年 酒持田本店】

3日目、出雲に戻り、木綿街道に行く。

ここは江戸時代から明治にかけて雲州木綿の集散地として栄えた場所、2001年から地域が立ち上がり、ノスタルジックな町並み、古きものと新しきものが程よく溶け合っている木綿街道が完成したとガイドさんが説明してくれた。

さらに酒造りの店主の淡々と話す中にも熱意を感じた。昔ながらの吟醸酒や純米酒などの特定名称酒、最近では出雲柿酒や生姜酒などアレンジを加えたバラエティー溢れるお酒の試飲をいただき、**伝統と創作のバランスの味**を感じた。

お酒は寒い地方に適しているだけでなく、寒い地方は農業ができず、生活のために工夫してお酒造りが始まったプロセスに感銘を受けた。



【神様のフェアウェルパーティーの場所 万九千神社】

最後に万九千神社（まんくせんじんじゃ）へ、ここは神様達が集い、各地方の神社へ帰っていく。最後の宴の場所である。色々な神行事が行われ、**来期の方針を決めて旅立っていく**みたいです。

私はこの3日間、島根という地で「自分を俯瞰すること」、「本当の自分を知ること」に気づいた価値ある旅となった。

最後に



最後に私は宇美神社の縁切り神社で書いたこと、
『無理にやっていることを捨てる』 『おいしいものにご縁がありますように』 と。

捨てるもの、ご縁があるもの、先人たちの知恵、息づく生活、短期間ではあったが

出雲の雲から木漏れ日のような光が差し込んだ瞬間、私の決意が確かなものとなった。



【私の決意】

「好きなことをやりたい」

「あばあちゃん、私、おばあちゃんの食堂で働きたい。お客様が喜んでもらえる心温まる料理を作りたい。おばあちゃんの伝統の味を引き継ぎたい。私なりに工夫して。」

おばあちゃんは満面の笑顔で「うん」とうなずいた。お母さんは目を真っ赤にして結の幸せを祈った。

完